

冷ヲ伏シテ熱ニ化スルコトナシ、中寒傷風ト大ニ異ニテ、予ビエト云ル一症アルナリ、何ノ國ニモアルベキヲ、コレニ相當ノ議論名目ヲ見ズ、檢索スベシ、總テ予ビエトイヘバ、世間皆輕症トノミ、思ヒ居レリ、然ルヲ寐冷ヨリ危篤ニ及ヲ發明セルハ卓見ト云ベシ、今ヲ以テ思ニ、安永ノ予ビエノ症ノ流行セルハ、瘟疫ノ一症ナルベク、予ビエトノミハ云ガタカルベシ、尋常ノ予ビエハ、年ニアレドモ、危篤ニ及ブコトナキニテ觀レバ、決定流行疫ノ寢中ヲ犯シテ、腸胃腸間ニ潜伏シテ、惡心不食水瀉赤白痢等ノ症ヲナスナルベシ、

〔蜘蛛の絲卷〕疫病

安永二年夏、疫病流行死亡多かりしゆゑ、官より寺院へ御尋ねありしに、疫病十九萬人、蓋し中人以上は、病者稀にして下賤に多かりしと、同三年の冬、嚴寒にて川々氷厚く通船なりがたく、諸品高價、同四年、凶作、同五年麻疹流行、三十以上の人、貴賤となく病まざるはなし、

〔救瘟袖曆〕溼温治驗

寶曆ノ末年、東都大疫。アリ、其證自汗壯熱煩渴、小便頻數淋痛短少、大便或ハ秘シ或ハ溏ス、甚者ハ頭眩嘔逆譫語脈浮緩ナリ、類案ニ羅子ノ說ヲ引テ云、風溼ト名ヅク、傷寒ニアラズトアリテ、五苓散ヲ主トセリ、此說ニ從ヒ五苓散ヲ煎湯トナシ與ヘテ、人ヲ救フコト多シ、

〔救瘟袖曆〕温疫轉變ノ記

寶曆ノ末年ヨリ今寛政ニ至ルマデ三四十年来、江戸ノ病人ヲ見ルニ、正傷寒ハ稀ニテ、四時共ニ多クハ温疫ナリ、温度ハ戾氣ナレバ正傷寒ノ第一種ナルノ比ニハアラズ、種々品々ナリ、此故ニ只一症ヲ知得タリトテ、盡セリトハ言ガタシ、予寶曆丑寅ノ頃二十四五歳ノ時ヨリ、専ラ治療ニ苦ミシガ、明和中マデ十二三年ノ後、時行一變シ、寛政ノ始ニ至テ又一變セリ、スベテ時ノ流行ヲヨク知得ズバ、測ラザル變ニ逢テ狼狽スルコト多カルベシ、予能工ナリト雖モ、犬馬ノ齡幸ニ八